

# 地方人民の創造力に帰れ

レーニンへの書簡、二通

## クロポトキン／原口遼訳

一九二〇年、三月四日 ドミトロフにて

敬愛するウラジミル・イリツチ君

通信局から労働者たち若干名が、私のもとにやって来て言うには、彼らのまことに惨憺たる現状について、貴君に伝わるように、何とかしてくれまいかとの事だった。この件は、単に通信局のみに関わるものでなく、ロシアの日常生活全般の状態にも関係があると思われるので、貴君にとりいそぎお伝えする次第である。

むろん、貴君とて御承知とは思いますが、これら労働者の給料で、ドミトロフ地区で生計を立てられると考える方がおかしいので、この低賃金では一プツシエルのじやがいもすら買えぬのだ。私もこの住人だから、そのことは実地に見て知っている。石鹼や塩を買おうと思っても、これがまた全然ない始末。製粉の値が上ったものだから、何とかして見つけでも、いざ買う段になると、八ポンド分の穀物、五ポンド分の小麦ですら手が届かぬ次第。つまるところ、糧食の支給を受けないことには、真正正銘の飢餓状態に迫いつめられる運命にあるのだ。

一方、かような物価の高騰に加えて、当地通信局の労働者たちが、モスクワの通信局食料供給中央局から受けていた微々たる配給のことだが（一九一八年八月十五日の政令では、一

人あるいは複数の労働者を有する家族には、小麦八ポンド、家族に労働不能者を有する場合、小麦五ポンドを追加する、とある）それが、もうすでに、二カ月も届いていないのだ。当地の供給局は配給をやってくれぬ。この労働者たち（ドミトロフ地区の一二五名）が、モスクワへ出した請願にはまだ返事が来ていない。一カ月前、一人の労働者が、貴君に直接宛てて訴える手紙を書いたらしいが、現在までのところ、返事を戴いていないという。

私は、これら労働者の状態が、まさに焦眉の急にあることを証言することが、義務だと考える。大半のものが文字通り飢餓にあえいでいるのだ。何よりも、彼らの顔がそれを物語っている。食物を得ようと家を出ても、どこへ行くあてがあるわけでもない。一方、それにもめげず、彼らは自分たちの仕事を良心的に遂行しているということを明言しておきたい。彼らは仕事に十分習熟しており、従って、そのような労働者を失うことは、地方の健全な生活維持の点からいっても、けっして得策ではあるまいと考える。

私は、ここでは、ソヴィエトの他の職種の労働者にあっても、窮境にあることは同様であらうということをお断言するに止めよう。

とどのつまりは、私は貴君に、全般的状況について一言申さざるを得ないのだ。モスクワみだいな中央におつては、地方の真の状態を知ることができぬ。当節の实情を握もうと思つたら地方にじかに住まなければなるまいと思う。彼らの日常生活と密に接触を保ち、その逼迫した暮しぶりと悲しみ、安っぽい石油ランプ一つ買うにしても、許可を下してもらおうと、お役所へ何回も足をはこんでは持ち込まなければならぬ男や女子供たちと、一緒に暮してみる必要があるのだ。

我々に課されたこの試験を切り抜ける道は一つ。早急に、より正常な生活状態へ移すように着手しなければならない。我々は、とり返しつかない、一大破壊に向っているのだから、こんな風な状態を長びかせてはいけぬ。連合国が貸しあたえてくれた機関車があ

●一プツシエルのじやがいもすら買えぬ低賃金

●モスクワにいては地方の真の状態を知ることができぬ

るからといって、また、我々ロシアの民にとって必要不可欠の穀物・麻・亜麻・獣皮等々のものを輸出したからといって、人民を救済することはできないのだ。

次のことは反論のないところだろう。たとえ党の独裁制は、資本主義に対し打撃を加えるのに妥当な手段だったかも知れない(それも、私には大いに納得しかねる)が、新しく社会主義の制度を作ることはお有害だということだ。必然にして必要なのは、地方の政治集団、地方の力である。それが、どっちを見回しても、どこにもない。そのかわり、跳梁跋扈しているのは、現実生活のイロハも知らぬ者ばかり。かような輩は、やることなすこと間違だらけなので、その代償として、支払わなければならないのは、何千もの生命と、全地域の荒廃ばかり。薪や、昨春の種苗配給のことだけでも、考えてみたまえ……

その土地の者の参加なくしては、農夫と労働者等、下からの組織なくしては、新生活を建設することは不可能だ。

まさにこの下からの組織を作る働きを、ソヴィエト農村会議が担うはずのものだったように見える。しかし、残念ながら、旧ロシアは、今のところ、名前だけがソヴィエト共和国と変わったにすぎない。圧倒的に新参者の多い「党」の者たち(何しろ、イデオロギーに強い共産党員は都市部に集中しているから)、彼らがなだれうつように入ってきて、人民を頭から押えてしまったので、この有望株とみなされた団体組織——ソヴィエト農村会議——を作るエネルギーとその影響力を微塵にも壊滅させてしまったのだ。目下のところロシアを支配しているのは、ソヴィエト人民の代表者たる農村会議ではなく、党委員会だ。しかも、その党の機関といえば、官僚機構の悪弊の中に動きがとれぬありさま。

現下の混乱から脱するには、ロシアは地方在任の人民の創造力に立ち帰らなければならぬ。それこそが、卑見によれば、新生活を創造する要因だと思われる。この方向の必要性が早く理解されればされるほど、事態は好転するだろう。その時が早ければ早いほど、

●社会主義の制度を作ることは有害だ

●党の機関は官僚機構の悪弊の中に動きがとれぬ

人民は新しい社会の形態を受け入れやすいと思われる。もし、現下の状況が長びけば、「社会主義」という、まさにその言葉は、呪いの言葉と化すだろう。これこそ、フランスにあって、ジャコバン党の支配後、四十年間に「平等」という観念に起ったところのものなのである。

志を同じくする者として

P・クロボトキン

一九二〇年、十二月二十一日 モスクワ県ドミトロフにて

敬愛するウラジミル・イリッチ君

イズヴェスチヤ紙とプラウダ紙とに掲載された発表によれば、ソヴィエト政府は、サヴィンコフ派およびチエルフ派、国家主義者たちおよびその作戦本部の白衛兵、それにウランゲルの将校たちの中から、社会革命党の分子を人質として、逮捕するという政府決定が明らかにされている。そして、ソヴィエト政府の指導者に対する暗殺計画があったときは、この人質たちを「容赦なく絶滅せしめる」とのことだ。

貴君の周囲には、仲間の同志たちに向って、そのような方法は、中世の宗教戦争当時の最悪の時代への逆行であること、その上、共産主義の原理に則って未来の社会を建設することを自らに引き受けようとする者にとって、ふさわしからぬことこの上もないことを、うながして想起させようとする者が、一人としていないのだろうか。いやしくも、共産主義の未来を大切にまじめに考えているものなら、誰もそんな暴挙に出れるわけがない。

●ソヴィエト政府は社会革命党の分子を人質として逮捕することを決定した

人質とはそもそも何たるかを、説明できるものがないなどとは考えられぬ。人質とは、ある罪状ゆえをもって、投獄されたものを指さない。敵方を威嚇する際必要だから保護しておくものを言うのだ。つまり、「もし、同志を一人殺すならば、こっちも人質を一人殺すが、それでもいいか」というやり方だね。だが、毎朝、捕まえた者を絞首台のところへ引っぱって行つては、「ちょっと待てよ、今日のところはやめとこうか……」などと嚇しては、連れ帰るのでは、これはどう見ても人質などとは呼べないだろう。

そして、貴君の同志たちは、これ即ち、人質とその家族への拷問復活も同然だということとが察せられぬのだろうか。

私は、権力者たちも安穩な日々が暮せないのだ、というようなことを耳にしたくないものだ。が、当節は、国王たちの中にも、暗殺の危険を、職業上やむをえぬ危険と見なししている者もいるらしい。

捕えられた革命家たちだが、彼らは、あるいは堂々と、死刑宣告を受けるかも知れぬ法廷の前で、責任をもって自己弁明をしている。ルイズ・ミシエルがそうだ。あるいは、マラスタヤヴォルテリヌ・ド・クレイルの例のように、むざむざと迫害されるがままにされるのを、きつとした態度で拒んだ。

国王たちや法王たちですら、自衛手段としてでも、人質を捕えるといった野蛮な方法を潔よしとしなかったものだ。それを、いやしくも、新生活の唱道者にして、新しい社会秩序の建築家たろうとするものが、敵対者に対してそのような手段に訴えることが、果してできるのだろうか。

このことは、貴君たちが、共産主義の実験がうまくいかなかったと見なしている徴候として、さらには、貴君たちにとって重大事たる体制を救うのでなくて、我と我身だけを守ろうとしている徴候としてみなされはしないだろうか。

● 貴君たちが我と我身だけを守ろうとしている徴候

貴君の同志たちは、貴君たち共産主義者は（これまでも誤りを犯してきたわけだけれども）未来のためにに任せている、ということ、実際わきまえていっているのだろうか。従って、いかなることがあっても、実に原始的テロリズムにも等しい行為によって、その任務を汚してはならぬのだ、ということを理解しているのだろうか。貴君には、過去、これらの革命家たちによって行なわれてきた行為は、新しい共産主義者の真摯な活動を、すこぶる難しくしているのだ、ということ、はつきりと悟って戴きたい。

私は、貴君たちを信じて言うが、貴君たち自身の生命よりも、共産主義の未来の方が大切であるのだ。そして、その未来を思うなら、あのようなやり方を貴君たちは止めざるをえない筈ではないか。

● 貴君たち自身の生命よりも、共産主義の未来の方が大切である

もろもろの欠陥がありながら（そのことは、貴君も御承知のように、私がよく知っている）十月革命はすばらしい発展をもたらした。それは、西欧の人々が不可能と考え始めていたのとは逆に、不可能ではないのだということを実地に示した。そして、いろいろな欠点にもかかわらず、それは平等の方向へと大きな歩を進めた。それを、過去へ逆戻りさせようとして、駄目にして戴きたくないものだ。

こういうわけだから、この革命運動を、なぜ、社会主義・共産主義のうちに内在している欠陥でなくて、旧体制、時代遅れの混乱、それに際限ない貪欲な職権の残存を示すような、革命運動を破壊するような道へと押しやろうとするのだろうか。

P・クロボトキン

(訳IIはらくちりよう・東京大学助手・英文学)

Two Letters to Lenin by P. A. Kropotkin

in Selected Writings on Anarchism and Revolution

©M. I. T. Press, 1970